



Title	THE PRIMARY STRUCTURE OF BOVINE HEART CYTOCHROME C1
Author(s)	Wakabayashi, Sadao
Citation	大阪大学, 1981, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	若 ^{わか} 林 ^{ばやし} 貞 ^{さだ} 夫 ^あ
学位の種類	理 学 博 士
学位記番号	第 5 1 9 7 号
学位授与の日付	昭和 56 年 3 月 25 日
学位授与の要件	理学研究科 生物化学専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	ウシ心筋チトクロム c_1 の一次構造
論文審査委員	(主査) 教 授 松 原 央 (副査) 教 授 池 中 徳 治 教 授 佐 藤 了

論 文 内 容 の 要 旨

ミトコンドリアの電子伝達系の一成分であるチトクロム c_1 は 1940 年に発見されたが、抽出、精製が困難であるため、その研究は限られている。特に構造に関する研究はほとんどなく、一次構造はもとより立体構造も判明しているチトクロム c との電子伝達の機構が明らかにされていない一要因となっている。そこで本研究では、ウシ心筋のチトクロム c_1 の一次構造を決定することにした。

チトクロム c_1 をトリプシン、Staphylococcus のプロテアーゼ、キモトリプシンで消化し、それぞれのペプチド断片をゲル濾過、イオン交換クロマトグラフィー、高圧濾紙電気泳動、濾紙クロマトグラフィーで精製し、それらのアミノ酸配列順序を手動エドマン法及び固相法のシーケンサーを用いて決定した。また、ブロムシアン分解によって生じたペプチドの分析及びヒドロキシルアミン分解を行い、アミノ酸配列をより確実なものとした。以上の分析により、総残基数 241 コのアミノ酸から成るチトクロム c_1 の一次構造が明らかとなった。ヘムを含む分子量は 27,874 で今までに報告されている値 29,000~31,000 より少し小さかった。決定した一次構造から算出されるチトクロム c_1 のアミノ酸組成は次の通りである。Asp13, Asn6, Thr7, Ser16, Glu16, Gln5, Pro22, Gly17, Ala18, Cys5, Val15, Met10, Ile4, Leu25, Tyr15, Phe8, Lys12, His9, Arg15, Trp3。

決定した一次構造上にはチトクロム c_1 の機能発現と関連して次に示すようないくつかの特徴が認められた。

- (1) ヘムは N 末端から 37 番目と 40 番目のシステイン残基を介してポリペプチド鎖に結合している。ヘム鉄への配位子としては、チトクロム c の構造との類似性から 41 番目のヒスチジンと 208 番目のメチオニンが考えられた。

- (2) チトクロム c_1 には22残基のプロリンが含まれ、5つのPro-Pro結合と一カ所のPro-X-Pro-X-Pro-X-Proという配列が存在するが、その重要性については明らかでない。
- (3) c 末端領域に疎水性、塩基性の残基の集合が見られ、チトクロム c_1 がミトコンドリア内膜に埋めこまれるのに重要な働きをすると推察された。
- (4) 酸性残基ばかりが集っている部位が2カ所存在し、チトクロム c との相互作用に関与していると考えられた。
- (5) ChouとFasmanの方法により、20%が α ヘリックス、34%が β シートの構造をとっていると推定された。

論文の審査結果の要旨

動物細胞のミトコンドリア呼吸鎖は電子伝達に伴うATP生産の場として重要である。この機能を理解する上で、ミトコンドリア膜系の酵素、蛋白質の構造を知ることは最も基本的な命題であるにも関わらず、現在までに可溶性色素蛋白質チトクロム c の構造と機能の関係がくわしく研究されたにすぎない。若林君はその c に直接電子をわたすと考えられているチトクロム c_1 の構造決定を手がけた。このものは膜に結合した親脂性の蛋白質で界面活性剤の使用により溶出することができるが、その後の扱いが困難を極め、多くの研究者が断念したものである。これを解決するため、 c_1 の各種誘導体を合成し、その断片化と配列順序の決定という手続きを経て合計241ケのアミノ酸から成る全一次構造を完成した。とくにヘム c を含む部分は困難を極めたが、その難関を突破することに成功した。この結果にもとづいて以下のような新事実を発見した。(1)ヘム c はチトクロム c と同様分子全体のアミノ末端側に位置し、生合成（ヘム結合機作）に共通の機作があるのではないかという示唆を与えた。(2)Cys-X-X-Cys-His-というチトクロム c と共通構造を示すことから、HisのイミダゾールNがヘムFeへの配位子の一つであろうと示唆した。(3)もう一つのFeへの配位子は208-MetのSではないかという示唆を与えた。これはこの近傍の構造がチトクロム c のMet（配位子）近傍の構造と類似しているのに基く。(4)Proの分子内分布がユニークであり、分子の立体構造形成上の役割を示唆した。(5)疎水性であり且つ塩基性であるという部位を分子のカルボキシル側に発見し、膜蛋白質の特性をここに求めた。(6)酸性部位の極在性を分子のアミノ末端側に見出し、チトクロム c との相互作用に必要な部位と想像した。なおこの部位は膜から外に出ていると考えられる。その他分子の立体構造に言及し、今後の研究の重要な基盤を提供しえた。

以上の結果、この論文は理学博士の学位論文として十分な価値あるものと認めるものである。